

## 2 海外都市行政視察 総括

---

団長 渡部 昭

### 1. はじめに

私たち平成28年度松山市議会議員海外都市行政視察団7名は、平成29年1月22日から28日までの7日間の日程で松山市と姉妹都市提携を行っているドイツ・フライブルク市を中心に、ドイツ・スイス・スペインの都市事情を視察・調査いたしました。

今回の視察・調査の目的は、①民間レベルでの相互交流や友好親善も盛んに行われ、今年で姉妹都市提携28年となるフライブルク市とのさらなる友好関係を深め合うとともに、②スイスのバーゼル市・ベルン市では「観光広域連携、交通施策」を、スペインのバルセロナ市では「街づくり、子育て支援、知的障がい者福祉」などを視察・調査することにより、海外の都市との交流を図り、今後の松山市政に反映させることであります。

フライブルク市と松山市の関係をさかのぼりますと、1961年（昭和36年）、松山市が戦後目覚ましい復興を遂げた西ドイツへ青年の派遣を計画したとき、快く引き受けてくれたのがフライブルク市でした。

その後、「松山フライブルク会」が発足し、市民同士での地道な交流が続けられていましたが、1980年代になって行政同士の交流も始まり、1988年（昭和63年）に姉妹都市の提携を行いました。

提携の際には、「距離が離れすぎていて実質的な交流などできないのではないか」と心配する声もあったそうです。しかし、昨年も11名の市議団がフライブルク市を訪問するなど、今では活発な交流が行われています。

フライブルク市役所前広場には松山市との姉妹都市提携を記念した、松山市の市章が埋め込まれており、市章を前にして撮影した私たちの3点の写真は、「フライブルク市姉妹都市ニュースレター」により報道される予定とお聞きしています。



(フライブルク市役所前広場の松山市章)

市長表敬あいさつでは、①私にとって、今回が2度目の訪問であり大きな喜びであること、②昨年も市議団が訪問させていただき、温かくお迎えいただいたことに対するお礼、そして③先立って視察したヴォーバン地区の環境に配慮



(フライブルク市役所表敬訪問)

した、素晴らしい街づくりの感想を述べた後、④去年の「少女像」の設置中止というご英断をいただいたことへのお礼を申し上げましたが、このことに対するコメントはありませんでした。

案内をしていただいたガイドさんの話では、過去の「ナチ」政治に対する歴史的課題に対し、例えば、右手を上げてのあいさつをしていた「ナチ」スタイルに対し、今は右手を上げるスタイルではなく、「人差し指を上げた」スタイルとなっており、過去の歴史問題に対する対応が徹底されているとのことでありました。

ゆえに、ノーコメントの背景には、ドイツの過去の歴史問題に対する対応と、政治課題への対応は区分けが徹底されているのではないかと思います。

今回の視察で特に印象に残った事項は、①日程2日目（1月23日）のフライブルク市長ディーター・サロモン氏と、松山市を20回以上も訪れ松山市との交流に多大な貢献をされている国際交流部長のギュンター・ブルガー氏を交えた約2時間余りの、笑いを交えた昼食会での活発な意見交換と、②各視察先でも常に話題に上がった移民や難民を含めた外国人労働者についてであります。このことについては、後述させていただきます。

## 2. 平成28年度海外都市行政視察団の結成から出発までの経緯

平成28年6月10日、平成28年度松山市議会議員海外都市行政視察団を結成し、7月12日の第2回打ち合わせ会において、団長、副団長の選任を行った後、随員職員を決定し、視察先及び視察内容について協議しました。

協議の概要は、①視察先は「姉妹都市を中心に、その近郊の都市」とする決まりから、ドイツ・フライブルク市との姉妹都市交流を中心に選定する、②視察テーマは、街づくり、子育て支援・知的障がい者に対する福祉施策、観光広域連携、交通施策などとする、また③経費節減を意識し、できるだけ連泊日程を考える、でありました。

9月27日の第5回打ち合わせ会において、市内旅行会社7社から提出された企画案について検討を行い、経費節減という点で最も優れた企画案を採用、後に事務局から報告を受け、(株)フジトラベルサービスの企画にすることを決定しました。

なお、視察団の派遣承認については、平成28年12月定例会初日の11月25日に議会の承認を受けました。

12月19日には、視察のテーマごとに、関連した松山市及び視察先の現状等を各担当課から説明を受け再確認するとともに、視察先の現状の情報収集に努め、これからの市政に反映するための視点について、事前の理解を深め合い

ました。

そして、平成29年1月22日、雲峰議長、原副議長、片山理財部長をはじめ理財部及び議会事務局職員の出席のもと、出発式を行いました。



(出発式の様子)

### 3. 姉妹都市との友好交流を目的としたフライブルク市役所訪問とヴォーバン地区及び旧市街地の視察

私たち視察団と随行職員8名は、1月22日(日)、出発式の後、松山空港9時発の便で中部国際空港に向かい、11時55分にフィンランド航空にて日本を後にし、ヘルシンキを経由してスイスのチューリッヒ国際空港に現地時間の18時20分に到着しました。日本との時差は8時間あります。

中部国際空港からヘルシンキまでの所要時間が約10時間15分、ヘルシンキからチューリッヒまでの所要時間が2時間50分、松山空港を出発してからの時間は乗り換えも含め約18時間となる長旅でした。

日程第2日目の1月23日(月)は、スイスのチューリッヒから、まずドイツ・フライブルク市のヴォーバン地区の視察に向かいました。

この地方は、地理的にフランス・スイス・そしてドイツとの国境に接してお



(ヴォーバン地区の街並み)

り、国を越えての通勤者も少なくないとのことで、日本でいえば東京・静岡間を新幹線で通勤するような感覚と思いました。

ヴォーバン地区は、若者向けの集合住宅地で2,000

世帯、約5,500人が住むエコタウンであります。日本流に言えば新しい団地と言えます。そこには、トラムの駅もあり、ソーラー発電の設備や地域暖房設備など省エネ対策が施され、サロモン市長がおっしゃっていたドイツ国内での「環境首都」フライブルク市が誇る「人が集まってくるタウン」と理解しました。

サロモン市長を囲んだ「明るい、笑いのあるなごやかな」約2時間の昼食会では、①フライブルク市の産業・経済と人口対策について、②フライブルク市の公共交通政策と街づくり政策について、③移民労働者や難民と言われる人々を含めた外国人労働者に関わることなどが意見交換の主たるテーマとなりました。

また、サロモン市長からは、東日本大震災による原発問題への質問があり、福島第一原発に対する海外での関心の高さを改めて痛感しました。

#### (1) フライブルク市の産業・経済と人口対策

フライブルク市の人口は約22万人、面積は150km<sup>2</sup>、平均気温は10.8度で、工業都市ではなく就業人口のうち、サービス業に4分の3の人が従事しています。地理的に見てフランス・スイスとの国境に近いことから、国境を越えての通勤者も少なくありません。

市内には大学をはじめとするソーラー、情報、メディア技術、バイオの研究機関が多数あり、大学が4校あり学生数は約3万人とのことです。

また、ドイツ国内では恵まれた温暖な気候から、フライブルクを含むバーデン地区は、古くからワインの産地であり、13あるドイツのワイン生産地域のう



(サロモン市長(右)とブルガー部長(左))

ち、ラインヘッセ、ブファルツに次いで3番目の広さの耕作面積を持っています。

人口動態については、多くの地域が人口減となっていますが、フライブルク市は増加傾向が続いているとのこと。その要因についてサロモン市長は、魅力的な市にするため若い人の子育てサポートに努めている、具体的には、収入が少ない人への家賃補助などを行うことで、人が集まってくるような市を目指しているとおっしゃっていました。

我が国では、「限界集落」などという言葉がはやるほど、各自治体は人口減少問題を大きな課題と捉え、都会からの若者を含めた人の受け入れ施策を実施するなど、この問題に取り組んでいます。サロモン市長が語った「人が集まってくるような市」の言葉に、この対応策のヒントがあるように思えました。

## (2) フライブルク市の公共交通政策と街づくり政策について

フライブルク市は、第二次世界大戦で市街地の大部分が破壊されましたが、中世以来の文化遺産を継承しようとする、市民の熱意によって古い街並みが再現されました。1200年頃から数百年の年月をかけて完成したミュンスター大聖堂を中心に、今も中世の雰囲気漂う、素敵なたたずまいの街です。また、環境政策の進んだ町としても知られており、1992年にはドイツ国内で「環境首都」にも選ばれています。

サロモン市長は、車社会の現実から、20年前に条例をつくり郊外ストアーの制限を行い中心部の衰退を防ぐとともに、中心部は車が走らないことで市民への安心を提供したと語っておられました。

具体的には、公共交通機関のチケット価格は、車の駐車場代より安くするとともに、市内への車の乗り入れをしなくて済む対策を図っているとのことでありました。

最近、我が国でも「スマートシティ」あるいは「コンパクトシティ」といっ

た、新しい街づくりが叫ばれていますが、東日本大震災を身近に見た私たちは、今までの便利さや効率性という経済を優先した街づくりから、太陽光や風力といった身近なエネルギーを活用し、「無駄がなく、しめやかに」、「人が安心、安全とは何か」、「人と環境」、そして「老人などの社会的弱者」などを考慮した街づくりとは何かを、この視察で問うきっかけになりました。

### (3) 移民労働者や難民も含めた外国人労働者について

フライブルク市の失業率は3～4%で、ドイツの平均が約4%、EU28カ国は9%程度であるが、外国人労働者という点では、難民と移民とは異なる。移民は労働者としての役割を担ってきたが、労働者の確保ということを考える場合、外国人労働者云々を考えるよりも、まずは働くシステムを考えるべきである。介護を例にとれば、所得の高い人は東ヨーロッパの人を雇用するが、これはいずれダメになる。その理由は、東ヨーロッパの人は高賃金になると自国に帰るであろうことが想定される。したがって、日本もベトナムなどから安易に労働力を確保しようとするのは、長い目で見ればダメになるのでは、とのサロモン市長の話でした。

なお、直接の話には出ませんでした。外国人労働者だけの問題ではなく、子どもの教育、格差、言葉など外国人の移民に関する問題は、今や全ての先進国の課題となっています。

我が国も外国人労働者について、生産者人口の減少対策として受け入れる論議がされ始めていますが、この問題に対しては、多くの国民がどのように理解しているのか、つかみきっていないのが我が国の現状ではないでしょうか。

サロモン市長がおっしゃった、「働けるシステムを考えるべきだ」との言葉の意味の深さが胸に刻まれました。

### (4) フライブルク市旧市街地の視察

私たちは、昼食会を終えフライブルク市の旧市街地の視察に向かいました。

その中心は、13世紀の初頭から300年以上をかけて完成した「ミュンスター大聖堂」で、この建築物はヨーロッパでも最も優れたゴシック建築の一つとされ、街と市民のシンボルとなっているそうです。



(フライブルク市旧市街地の視察)

先の大戦で市街地の大部分が破壊されましたが、市民の熱意により古い街並みを再現したとのことであり、フライブルク市の旧市街地を大事にすることが「街づくり」の基本にあることを肌で感じたところでもあります。

#### 4. スイスのバーゼル市・ベルン市での視察・調査

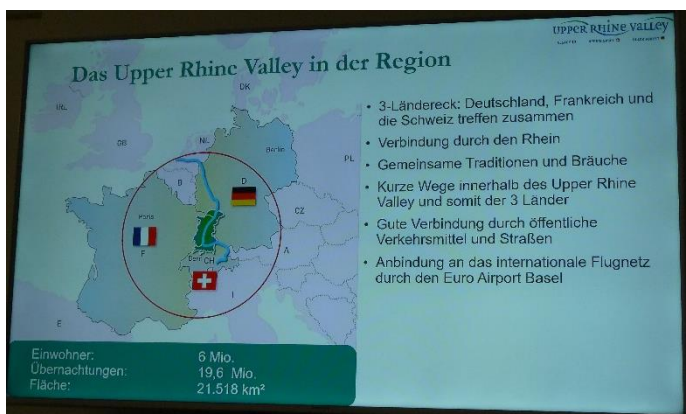
1月24日(火)、チューリッヒのホテルを8時に出発し、約1時間をかけてバーゼル市に到着しました。バーゼル市は、スイス北西部に位置し、ドイツ・フランス・スイスの3つの国が接しています。チューリッヒ・ジュネーブに次ぎ、スイス第3の都市で人口は約175,000人です。

この地は、ライン川最上流の港を持つ最終点で、ドイツ語圏に属しますがフランス語を使う人も多いそうです。

私たちは、バーゼル市観光局で、ドイツ・スイス・フランスの3カ国のライン渓谷上流部地域の「広域観光連携の試み」について、説明を受けました。

その概要は、2009年にEUから支援を受け、国境を接する3カ国が連携し、自然景観等を売り物に協議をスタートしたが、なかなか足並みがそろわなかったそうである。また、EUからの支援が減っている中で、①エリア全体の地名度アップや、②3カ国が集まり、回れるメリットなどに力を入れてきた





(プロジェクトの地域)

いと担当者のアン・ビュラーさんは抱負を語っていました。

最後に、このプロジェクトの印象を申しますと、「3カ国の広域観光の連携において訓練ができていなかったが、共通のメニューなどでエゴが出ない取り組みを目指す。」との

担当者の言葉の中に、各国それぞれの事情の難しさを感じました。

そして、午後からはベルン市の交通局の視察に向かいました。

ベルン市は、スイス連邦の首都で人口は約14万人、チューリッヒ、ジュネーブ、バーゼルに次ぐ4番目の規模の都市で、熊が市の紋章になっているそうです。

ベルン市内への通勤者は約13万人で、その46%が公共交通を利用し、マイカー利用は41%であります。なかでもトラム（市内電車）は、52車両がひっきりなしに中心地を走っており、これ以上のサービス提供は困難とのことでした。なお、狭いところを最大限走らせてい



(ベルン中央駅)

るので、観光客には注意をお願いしているとのことでした。

ちなみに、マイカーの乗り入れ制限対策について、住民投票にかけたが僅差で否決になったそうで、住民の直接的な政治参加がごく普通になっていることを改めて感じました。



(トラムへの乗車体験)

また、トラム（市内電車）への乗車体験をしましたが、切符の値段は我が国のような距離制によるものではなく、30分、1時間といった時間制によるものでありました。その理由は、距離制より時間制の方が利用客のニーズを反映した結果とのことでした。距離制に慣れている私たちには、どうも理解しにくい制度です。

## 5. スイスのチューリッヒからスペインのバルセロナへ

1月25日（水）、12時20分発の便でチューリッヒを離れ、バルセロナへ向かいました。

搭乗までの時間を利用し、チューリッヒの市街地を視察しました。私たちが3日間、宿泊したこの街はスイス最大の都市で人口は約39万人で、チューリッヒ都市圏地域には200万人近くが住んでいるそうです。

この街で特に印象に残った出来事は、過去のEECから現在28カ国が加入するEUへとヨーロッパ統合のきっかけとなったイギリスのチャーチル首相に



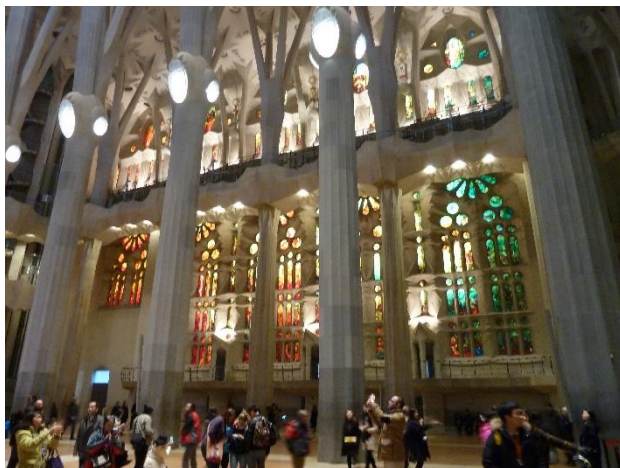
(チャーチル首相によるヨーロッパ宣言記念石)

による「ヨーロッパ宣言」が1946年9月、この地であり、それを記念し刻んだ石が路面に組み込まれており、歴史の街だなどつくづく感じ入りました。

昨今、イギリスのEU離脱や通貨不安、そして失業・移民や難民問題などで揺れるEUと言われているだけに、「チ

「チャーチルと戦後の欧州統合運動」がどのような内容であったのか学んでみたいと思っています。

その後、私たちは14時にバルセロナ国際空港に到着し、早速、サクラダファミリア建築財団の説明を受け、引き続き、施設内の視察を行いました。



(サクラダファミリアの内部)

サクラダ・ファミリア（聖家族教会）は、1882年にフランシスコ・ビヤールが着工し、アントニ・ガウディがそれを引き継ぎま

したが、彼の死後（1926年）、未だ建設が続く未完成の教会であります。

この歴史的建造物は、スペインで最も観光客が多く、2008年には270万人の人が訪れたとのことでもあります。

スペインで最初に鉄道が引かれ繊維産業で栄えたバルセロナ市の人口は約160万人でその都市圏人口は約421万人であります。スペインには地震がないことからバルセロナ市だけでも世界遺産が10あり、年間の観光客は約700万人に上るとのことで、「いかに質の良い観光客」を呼びこむことができるかが、観光政策の柱になっているそうです。

街づくりの基本的な考え方として、大型ショッピング店には規制があるとのことでした。その理由は、「衣・食・住」が1つのセットになる街を基本に、老人が一人でも生活できるように、また道路は歩くためにあるのではなく生活のためにあるとしています。例えば、ごみ箱は50メートルおきに歩道に設置されるとともに、小売店舗が身近なところに多数あり、老人の日常生活には便利な街だと思いました。

自動車については、街への乗り入れをいかに減らすかが政策になっている中で、バイクは優先されていることからバイクの路上駐車は可となっています。また、市役所では自転車をレンタルしているとのことで、城壁を起源とする旧市街地を守りつつ、市民生活への配慮が行き届いた街づくりだと思いました。



(バルセロナ市街地)

## 6. バルセロナ市での「子育て支援・知的障がい者福祉」の視察を経て帰国の途に

1月26日（木）ホテルを出発後、市内のカスポリノの保育園で「子育て支援と保育」についての説明を受け、施設内を視察しました。



(カスポリノ 保育園での視察風景)

バルセロナ市には民間保育所が約200カ所、市では98の保育所を有しているとのことです。ここでは「保育」という考えではなく、「教育」という考えで子どもを預かっており、説明には常に「教育」という言葉が使われていました。

そこは、0歳から3歳児の教育と保育を行う施設であり、親の参加を大事にした上で子どもの自立を促し、その後の3歳から6歳児教育につなげる方針とのことでした。

午後からは、知的障がい者施設の「セントロ アテンシオン ペルソナリサダ エステイミア」を視察しました。

この施設では、障がい率85%（重度障がい）の人が対象で、バルセロナの施設には、①市の施設、②プライベート財団による施設（非営利）、③営利施設の3つの形態があり、この施設は②のプライベート財団による



（レクチャーの様子）

施設で、その運営については行政からの補助金が80%、残りの20%については入居者負担でありました。

カルロス施設長さんの説明では、運営については、プライベート財団による施設（非営利）であることから、赤字になれば行政に頼らなければならないため、赤字にならないよう努めているとのことでした。なお、20%の負担については、家族の負担のほか、スポンサー企業に支援をお願いしています。

その背景には、州や政府により職員の数は定められているとのこと、この施設は30人に対し指導する先生が20人という充実した体制ですが、赤字になればこの体制が崩れる可能性があり、スポンサー企業への支援のお願いに努めているとのことでした。

また、ショートステイ的な短期の入居も可能とのことであり、家庭と施設の一体感を感じました。



（施設内の視察風景）

また、最近の我が国での「精神的な障がい者」への取り組みについての意見交換も行いました。具体的には、①発達障がい者への対応について、また②我が国における「閉じこもり」問題などです。バルセロナ市でも、こ

こ最近はメンタル的な障がい者が増加しているそうで、例えば、発達障がい者には週に1度この施設にきて精神学者、親や生徒で訓練をしています。その理由は、「将来を考えれば大変だから、今の間に対応すれば治る」とのことでした。

②の「閉じこもり」については、陽気なスペイン人の性格でしょうか、ここではその実態はなく不思議がられてしまいました。

1月27日（金）は、バルセロナ国際空港を10時15分にたち、ヘルシンキ経由で翌朝の1月28日（土）9時40分に中部国際空港に到着した後、松山に着いたのは12時45分で、機内泊を含め約1日半の帰松の長旅となりました。

松山空港では、雲峰議長・原副議長をはじめ議会事務局の皆さんのお出迎えを受け、全員が元気で帰着できたこと、また視察先などでは温かく歓迎されたことを申し上げ、帰着の報告としました。

## 7. 結び

以上が、私の今回の視察の所感であります。意見交換のなかで、私たちが抱える少子・高齢化による労働力人口の減少という課題に対し、戦後の復興期から国内の労働力不足を補うために、多くの経済移民を受け入れてきた視察先の国々の、雇用政策やその子どもたちへの教育政策、そしてEUという共同体のなかで国を越えての通勤の現状やその連帯のあり方をお聞きし、海外の都市を視察・調査しなければ理解できない、「現実のグローバル化」を直接に肌で感じることができました。

今後は、この視察で経験させていただいた知識を更に深め、市政に反映してまいります。